

本美濃紙 / 原材料－収穫と加工過程

和紙は、植物繊維ときれいな水に、粘度の高い物質を混ぜ合わせることで、繊維が塊にならないようにしてつくられます。繊維は楮（こうぞ）（カジノキ）、ミツマタ（ジンチョウゲ科）、雁皮（がんび）（アオガンピ属の低木）から加工されます。繊維は濡れると分子レベルで結束し、丈夫で破れにくい紙ができます。

本美濃紙には、茨城県大子の大子那須楮の白皮が使用されます。この長く光沢のある靱皮繊維のおかげで、他の植物繊維よりも透光性に優れ、障子や提灯、美術品の保全に適した軽量で、なめらか、かつ丈夫な紙ができます。

楮の幹は毎年冬に、樹皮が固く壊れやすくなる前に収穫します。楮の束を約 90 分蒸らし、樹皮をさらに柔らかくします。そして、木が冷えて皮が硬くなる前に、外皮を手で素早く剥きます。100 キロの楮の枝から、約 4 キロの紙が生産されます。廃棄された茎の芯は、薪として用いることができます。

白皮（幹の内側の白い部分）は長良川の浅瀬に広げて流水で洗い、数日間日光で漂白します。今日では、多くの和紙職人が、天然の湧水や川の水を蓄えた屋外の大きな水桶で、この作業を行っています。白皮をソーダ灰と一緒に数時間煮て柔らかくし、繊維に分離させた後、繊維を念入りに選別して不純物を取り除きます。

和紙制作におけるもう一つの主要素材は、とろろあおい（黄蜀葵）の根から抽出される粘着物質、ねべしです。ねべしは、水とパルプ状になった繊維に混ぜて、繊維が水中で均一に広がり、塊にならないようにするためのものです。すり鉢の中で丸槌を使ってとろろあいの根を手打ちで砕き、数日間水に浸しておくと、根から粘液がにじみ出てきます。これがねべしです。こうしてできた混合物をろ過した後、水へと流し込んで紙を作ります。